
邪神のディープ・キス ~ワンダーランドは眠れない~

雷都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邪神のディープ・キス → ワンダーランドは眠れない

【Zコード】

Z4800Z

【作者名】

雷都

【あらすじ】

舞台は、眠りの世界である【幻夢郷】と、覚醒の世界である【幻モントー郷】の、ふたつに分けられます。

ワンダーランドのアリスが生み出した邪神を、モントー・ランドに暮らす高校生の「国広太一（主人公）」が退治する。というのが、大まかな筋です。

邪神を倒すべく戦う太一ですが、彼自身もまた、邪神「クトゥル」

の力を秘めていました。

そして、クトゥルー（タコ）としての力をすべて引き出すために、
ワンダーランドにいた八人の少女と契約しなくてはならないことを
知ります。契約の方法は、「女の子とキスすること」。

かくして、八人の女の子と契約をすることになつた太一。人間と邪
神のはざまで葛藤しながらも、太一は仲間を守るために、他の邪神
と戦うことを決意します。

プロローグ（前書き）

タイトルからおわかりになるかと思いますが、クトゥルー神話と不思議の国のアリスを、混ぜあわせたような世界観になっています。

ちなみに作中では、「クトゥルー神話」および、「不思議の国のアリス」という作品は存在しません。そのことを念頭において、お読みください。

両作品を知らないでも、楽しめる話になっています。

プロローグ

人の意識が届かない幻夢郷【ワンドーランド】で、少女の魂がさまよっていた。

眠りの世界では、彼女は何にでもなれた。

万物の根源 少女觀念体【ヨグ=ソトース】だった。

彼女は何にでもなれる。それ故に、彼女は何者でもなかつた。偏在しながらも、孤独である少女の魂に、ある男が近づいていく。

眠りの深淵にもかかわらず、男は意識を保つていた。

彼は少女の魂へ物語る。

それは、『アリス』という少女が、不思議の国を遍歴する話。明晰夢のように、素敵なお伽話だった。

はじめは警戒したものの、少女の魂は、男の話を食い入るようこ聞きだした。

しかし。

『アリス』が赤の女王に追われるシーンで、男は口をつぐんでしまう。

「ねえ。それからどうなるの？」

少女の魂は、続きを催促する。

男は答えずに、ゆっくりと手を差し伸べた。

そして、ありつたけの可愛さと、わがままを込めて。

少女の魂に実体を与えた。

「物語の結末は、君が見つけて『らん』」

再び口を開いた男は、少女觀念体【ヨグ=ソトース】から生まれた女の子の、名前を呼んだ。

「アリス」

男が去った後。

アリスは、幻夢郷【ワンドーランド】を独立国家にした。好奇心を満たすために、ひたすら不条理な法律をつくった。陽気で愉快な仲間たちと、宴を楽しんだ。

アリスの物語は、ハッピーエンドを迎えるよつとしていた。だが。

覚醒世界に住む者たちが、彼女の物語を書き換えていく。目覚めたまま、夢を犯した。

アリスに淫らな妄想を押し付けた。

少女の体は、気持ちよくなる道具に変えられた。

幻夢郷【ワンドーランド】は腐敗し、暴力と放蕩がはびこつた。

それは、欲望だけの革命だった。

独裁者の権力を、アリスは失つた。

瀟洒なドレスの下で、柔らかい肉体が震える。

『何故……。

私の痛む顔を、そんなにも悦ぶの?

如何して……。

私から滴る血液を、そんなにも嗜うの?』

夢で生まれた少女は、自分のいる場所が悪夢だと知った。押し込められた劣情に、アリスの体は白く潤る。だが反面、涙は枯れていった。

かつて流した涙の池は、泥濘となつた。

仲間たちは、目覚めの世界へと逃げていつた。

夢の世界の果てで、独りきりになつたアリスは、覚醒の世界を憎んだ。

赤児のように泣いた。

それは、虚ろなフルートの音色に似ていた。

ゴボリ。ゴボリ。

アリスの白い肌が、青黒く泡立ち、膿んでいつた。

膿は、臓物を煮詰めたような臭氣を漂わせた。

「復讐よ」

体を覆う膿に、アリスは命令する。

「復讐しなさい！ 覚醒の世界に生きる者どもの、皮を削ぎ、爪を剥ぎ、肉を焼き、骨を削り、眼を磨り潰して、脳に悲鳴を流しこむのよ！」

彼女の声に、従つみつこ。

泡のなかからは。

ゴボリ。ゴボリ。

名伏しがたき肉塊が、産まれ落ちた。

肉塊は雄叫びを上げ、異臭を放ちながら、奇怪な姿で動き出す。

邪な神が誕生した瞬間だつた。

誰もいなくなつた幻夢郷【ワンドーランド】で、闇が祝福していくた。

腐つた肉のこすれ合ひ音が、互いの福音となつた。

アリスは決意した。

少女とこゝ、自らは語りかけぬ受動と呼ばれた肉体で。いま、総てを物語る。

暗黒神話の大系を、語り尽す。

「出できなさい！ 私の邪神【ぬごぐるみ】たち

アリスに込められた、自分を陵辱した者たちへの怒りが、憎しみが、恨みが、吐き気が、殺意が。

膿から這い出る。

異形たちが、どどまるこどなく溢れてくる。

アリスは、産み落とした邪神の群れを見渡して。晒つっていた。

（もうすぐ、愚かな覺醒の民は氣づくでしょう）

眞実は捏造されていたと。

「すべての価値観は、反転するわ。眞の理とは、

驚異こそが平常で！
瘴氣こそが定常で！
病理こそが健常で！
獵奇こそが、正常なのよ！
そして……」

アリスは、眠りと覚醒の境界を、見上げながら続ける。

「浅瀬に戯れるものが、最も深い闇を知り！
優雅に羽撃くものが、最も重い罪を負い！
無垢に微笑むものが、最も鋭い歯を隠し！
覚醒に暮らすものが、最も脆い生に縋っているのよ！」

アリスの叫びを皮切りにして。
邪な神たちの咲笑が、次元を超えて響きはじめた。

朝起きたら、俺の目の前に、氣色悪いバケモノがいた。

ベドロのようにぐちゃぐちゃしたバケモノは、「テケリ・リ」といつた感じの、この世のものとは思えない声で笑つた。

「なんだ。こいつは」

俺は試しに、デコピンをかましてみる。バケモノは見た目どおり柔らかく、俺が弾いた指は、ヤツの体へとめり込んだ。

「テケリ・リ！ テケリ・リ！」

バケモノは叫びながらのた打ち回ると、消えた。

「……どうなつてやがるんだ」

俺はベッドから起き上がり、バケモノがいた場所を確認してみる。ヤツの痕跡はどこにもなく、ただ俺の頭の奥に、耳障りな笑い声が残響しているだけだった。

朝っぱらの怪現象。だが、異変はそれだけじゃない。

寝ている間に枕へ垂らした、俺の唾液が、真っ黒だつたのだ。

「まるで墨みたいだな」

俺は、枕のシミを見ながらつぶやいた。やはりこれは、俺の仕業なのだろうか。

試しに、手の甲をなめて確認してみる。

透明だった。

そりやそうだ。唾液が黒いはずがない。

（寝ぼけてるんだな。俺）

バケモノも、黒い唾液も、なにかの見間違いだろう。俺は自分をそう説得し、階下へとむかつた。朝食の準備をしなくてはならないのだ。

幼いころに母さんを亡くした俺は、親父と妹の三人で暮らしている。が、このふたり、超がつくほど料理ベタだった。とても人が食べられるものではない。

よつて消去法的に、俺が料理をまかなうことになつていてる。

焼き魚に白飯、豆腐とワカメのみそ汁といつ、平凡な朝食をこしらえていると、親父が起きてきた。よそつたばかりの白飯を、一口つまみ食いする。行儀の悪い男だ。

「おい太一。米は柔らかめに炊けと言つてあるだろ？」

「つむせーよ」

行儀悪い「つむせ」、ダメ出しあとは。我が親父ながら、いい度胸していやがる。

「嫌なら食うな」

俺はそう吐き捨て、料理の続きをとりかかる。

「ふえ～ん。ママ、太一がいじめるよお～」

甘えた声をだして、親父が奥の間へと走つていく。奥の間には、親父が作った母親の等身大ドールがある。

立体造形師である親父は、人としては最下層だが、造形の腕だけはたしかだつた。遺影の代わりに製作した母さんのドールも、かなり精巧につくられてる。もっとも、俺には、母さんの記憶があまりないのだが。

「ママ。太一がいじわるするよお」

「悪かつたよ。見苦しいから、やめてくれ」

母さんの人形にすがる親父があまりにも哀れだつたので、俺は謝つた。まったく、世話の焼ける人だ。

「お兄ちゃん。おはよ」

眠そうな目をこすりながら、妹の蓮も起きてきた。

「ああ。さつそく飯にするぞ」

魚が焼けた匂いが、リビングに充満していた。

「いただきます」

家族そろつて、手を合わせる。俺たちはいつも三人で食事をとることになつていた。「ご飯を食べるときは、みんな一緒にやなきやだ！」という、親父の方針によるものだ。

まあ、家族で食事をすることに異論はないのだが。

妹の食生活を見ていると、なんだか食欲がなくなってしまいます。

「……なあ、蓮。たこわさばっかり食うなよ」

「うーん

「たこわさが好きなのはわかるけど、魚も食えよ。せっかく焼いた

んだし」

「うーん

「朝からたこわさを食り食いつ女子中学生を見てたら、一日の活力がなくなるよ」

「うーん

生返事をくり返すだけで、ぜんぜん聞く耳をもたない。ダメだこりや。

「蓮が食べないなら、お父さんもうつむかうぞ」

親父が、蓮の焼き魚を奪ひ。意に介さず、たこわさから顔を上げない妹。

見慣れた光景だった。

食事を終え、俺は洗面台で歯を磨いていた。

すると、またしても異変が起きた。

「テケリ・リ」

バケモノが現れたのだ。

寝室で見たバケモノとは、少し違うような気もしたが、腐った水あめみたいな体は共通で、やはり気持ち悪かった。

しかも、磨いていた俺の口のなかは、真っ黒な泡だらけになっていた。

「見間違ひじや、なかつたのか」

俺の体はどうかしてしまつたらしい。

とりあえず、口中の泡をすすいでから、洗面台に付着した黒い液体を洗い流す。こんなところを蓮にでも見られたら、ややこしいことになる。俺は、唾液が黒いという証拠を、必死になつて隠滅していた。

「テケリ・リ」

慌てふためく様子がおかしかったのだ。バケモノは、俺を見ながら笑っていた。

とくに眼球らしきものも口らしきものもあるわけではないが、バケモノは確かに、俺を嘲笑していた。

「お前の愚行、万死に値するぞ」

バケモノへ、指を鳴らしながら近づいた。俺は、バカにされるのが何よりも嫌いなのだ。売られた喧嘩は買い占める。相手がたとえ、ヤクザだろうと、バケモノであろうとだ。

デコピンの餌食にしてやる。

「失せろ」

弾いた俺の指が、バケモノを粉碎する。

「テケリ・リ！ テケリ・リ！」

寝起きのときと回じように、ヤツは奇つ怪な声をあげ、跡形もなく消えた。

ふん。

なんだかよくわからんが、俺をバカにする奴は、あの世で反省するんだな。

「ねえ、お兄ちゃん。何やつてんのー」

蓮が、ドアを激しくノックした。

「早く出てよー。遅刻しちゃうよお

「悪い。ちょっと待つてろ」

俺は鏡で、口のなかを確認してみた。もう、唾液は透明に戻っている。おそらく、あのバケモノが近づいてくると、黒くなるメカニズムなのだろう。

俺は、なにともなかつたかのよう、扉を開けた。

「なにやつてたの、お兄ちゃん」

「ちょっとな。バケモノがでたんだ」

「……え？」

「なんか、黒いナメクジが何百匹も集まつたような、変なヤツだ」

「やめてよ。ううこう話……お兄ちゃん、レンがお化け嫌いなの知ってるでしょ」

蓮は泣きそうな顔で、怒った。

「本当なんだって。わざわざまでいたんだよ、ちゅうぶん蓮が立つているあたりに」

「もう！ 怖がらせないでよ」

「心配するな。俺が、『テロペン』で粉碎しておいたから」

「そ、それならこいナビ……」

安心する蓮。

「こいつは昔から、靈とかお化けとかいう類が苦手だ。靈感なんてないくせに。たいていこういう奴は、見えないものを想像しすぎて、必要以上に怖がっているだけなんだ。俺もお化けらしきものをはじめて見たが、ちょっと氣色悪いだけで、なんてことなかつたぞ。」

「つて、ホツとしてる場合じやないよ！ 早く準備しなきゃ！」

蓮はバタバタと鏡の前に立ち、顔を洗いだした。

「じゃあ、俺は先に言つてるぞ」

「あつ。待つて、お兄ちゃん……」

洗面所を出ようとした俺を、蓮が引きとめる。洗つたばかりのびちやびちやの顔は、なぜか神妙だった。

まさか、気づかれたのか？

俺の唾液が黒くなっていることに。

だが、蓮の一言は、俺の予想とは違つていた。

「……そのお化け、おでこあるの？」

「いや、ないけどさ。指で弾いたら、ビードルみたいにパンパンなんだよ」

「そんなものかな……」

蓮はいまいち納得していない様子だった。

なんだつてんだ。急にまじめな顔をするから、ビッククリしたじやねーか。

とにかく、俺の瞳につけてはなにもバレていなければいいんだ。

俺は胸をなで下ろしながら、カバンを持つて玄関へと向かった。
靴を履きながら、俺は考える。

(しつかし、まさか唾液が黒くなるなんてな)

今のところ、人体に影響はないようだが、俺にとつてはこれ以上
ない悪影響があつた。

唾液が黒くなるなんて、この国広太一には、あつてはならないこ
となのだ。

それはなぜかといふと……。

(キスが、出来なくなる)

たかがそんなことかと、笑うなれ。俺にとつてキスとは、レー
ゾンデートルそのものなのだ。

というのも、俺にはなぜか、子供の頃からキスに関する超絶テク
ニックがあつた。近所の女の子を始めとして、その姉妹、あるいは
母親、果ては幼稚園の先生や歯科衛生士にいたるまで。不意をつい
た俺のキス攻撃によつて、メロメロにした女性は数えきれない。

そして俺は、『舌の曲芸師』とか『吸盤王子』とか、『キス神』
とまで呼ばれるよつになつた。

もつとも。

俺のキスには自分でも怖くなるほどの催淫効果があるので、ここ
最近は自粛していたのだが。

(唾液が黒いとなつたら、キスの魅力も、激減するだらうな

くそ、商売あがつたりだ。

『キス神』の看板を、下げるはめになる。

「俺がなにをしたつていうんだ」

ペツ。なかばヤケになつて、俺は庭に唾を吐き捨てた。
庭に広がる、俺の唾液は。

真つ黒だつた。

俺は悪夢を見ているのかもしれない。

もしそうだとしたら、いつかは覚めるだろ？

そんなことを考えながらも、とりあえず俺は、通っている「ルルイ工学園」へと向かった。

朝の通学路に、変化らしきものはない。嗚呼囁町はいつもどおりだ。

おかしいのは俺だけみたいだ。

「おはようだよ。太一」

俺に近づき、あいさつをする姫カットの女の子。

幼馴染みの城座 実乃莉だ。彼女とは、幼い頃からの付き合いがある。

実乃莉もいつもどおり、頭に赤いリボンをつけ、のんびりと微笑んでいた。

「ああ……おはよう」

できるだけ平常心を装いながら、俺はあいさつを返した。今はあまり口の中を見せられない。もじもじと、歯切れの悪いあいさつになってしまった。

「どうしたの、口をおさえて」

「いや……別に」

「もしかして、口臭を気にしている？」

「ふつ。愚問だな」

俺は肩をすくめてみせた。

キス神と呼ばれた俺が、口臭の手入れを怠るわけがないだろ？

しかしだ。唾液が墨のようになつていることがバレるよりは、いつそのこと、口が臭いと思われたほうがマシかもしれない。

黒い唾液をとるか、口臭をとるかで悩んでいると。

俺たちに向かってノラ猫が数匹、歩いてくる。

「じゃー一体の猫たちは、実乃莉になついていた。彼女からは動物を引き寄せるフローモンでもでているのだろうか。猫たちはこぞつて甘えた声で鳴くと、彼女のふくらはざわに頬をすり寄せる。

「す、ぐ、可愛いんだよ」

実乃莉は猫を撫でながら囁く。

「太一も、撫でてらんよ」

「いや。俺はこゝ。あまり氣に入られてないよつだからな」「どうしてそういう感ひの」

「だつて、ほり」

俺は猫たちの尻尾を揃さした。

「こいつら、尻尾を立ててるぜ」

「太一に近い猫ほど、立ててるね」

「やっぱ嫌われてんだ」

「そんなことないよ。猫が尻尾を立てるとさはね、甘えてるんだよ」

そうだったのか。てっきり、警戒しているのだと思つていた。

ちょっと嬉しくなつた俺は、猫たちの頭を撫でてみた。

「ふむ。こうしてみると、案外かわいいものだな」

「でしょ、い」

俺たちが猫と戯れていると。

とつぜん。辺りが暗くなつた。まるで夕暮れ時のように、灰色の闇に包まれている。

「なにが起きたんだ」

朝からハピニングつづきの俺は、もつたにがなんだかわからなくなつた。

だが。慌てているのは俺だけのようだ。

実乃莉はと、いよいよこの時がきたかとばかりに、覚悟の決まつた表情になつていて。

「ついに、本格的な【星辰異常】が起きたんだよ」

「おい実乃莉。それはどういふ意味だ」

わけのわからないことを言つてゐる。長年つきあつてきた無一の幼馴染が、遠くに感じられた。

「説明はあとだよ。とにかく今は、アイツを倒すことだけを考えて」

実乃莉が見上げながら指さした先には。

巨大なコウモリのような影が、俺たちを見下ろしていた。

「な、なんだ……あいつは」

「ナイトゴーントだよ」

実乃莉が言つた途端。ナイトゴーントと呼ばれたそれは、俺たちに向かつて急降下する。

ギロチンのように落下してくる巨大コウモリを、俺は間一髪でかわした。横に飛び、地面を転がる。

「実乃莉！ 大丈夫か！」

俺は起き上がり、実乃莉の方を見た。彼女は、ナイトゴーントの行動を予期していたかのごとく、軽やかにかわしていた。

「わたしは大丈夫だよ。でも、猫たちが……」

ナイトゴーントの一撃によって。

集まつていた猫たちは、惨殺されていた。アスファルトを赤く染める、動かぬ肉塊になつていた。

「なつ……」

俺が、見るも無残な光景に言葉を失つてゐると。

シユウウウウ。

蒸発するように、猫は消えた。

「てめー。猫どもをどこにやつた」

俺はナイトゴーントに問い合わせる。だが、コウモリの姿をしたそいつには、顔がなかつた。聞く耳も、話す口もなかつた。夜空を濃縮したような闇だけが、頭部を形づくりつてゐる。

代わりに、実乃莉が答えた。

「太一。残念だけど、猫たちは存在ごと消えてしまつたんだよ」

「くそつ。せつかく仲良くなつたつてのによ…」

俺は握り拳をかためる。このコウモリもどきは、デコピンだけじ

や済まさねえ。

「猫たちに、地獄で詫びろ！」

ナイトゴーントに、全力で殴りかかった。顔のない頭部に拳がめり込む。

クリーンヒットなはずだ。

だが、手応えはまったくなかつた。

「キュケエエエエエ！」

耳をつんざく甲高い声を出しながら、ヤツは翼を振り払う。羽による攻撃をもろに食らつた俺は、激しくふつ飛んだ。

「くつ……。なんてパワーだ」「

俺は胸をおさえながら立ち上がる。打ちのじるが悪ければ、内臓が破裂していただかもしれない。

「今のわたしたちのじや、アイツには勝てないよ

実乃莉が、俺に耳打ちする。

「だからつてよ。素直に負けを認める気はねえぞ」「

もちろん。アイツを倒す方法は、あるんだよ」

「どうすりやいいんだ？」

「こうするんだよ」

実乃莉は俺を抱き寄せるときスをした。

なにをしているんだ。こんな緊急事態に。実乃莉はもう、俺の知つている幼なじみではなかつた。

離れようとしたが、実乃莉は俺の首に手を回し、強く引きつけてくる。

唇が、舌が、絡みついていく。

「キュケエエエエエ！ キュケエエエエ！」

ナイトゴーントは飛び上がり、頭上で好色な金切り声を発していった。それでも実乃莉はキスを止めない。

みるみるうちに、実乃莉の体が黒く染まつていった。おそらく、俺の唾液のせいだろう。

彼女の白かつた肌が、漆黒になつた。実乃莉はポケットから、

一冊の本を取り出した。

「これは魔導書の【ナコト写本】だよ。太一に秘められたクトゥルーの力を、引き出せるんだよ」

「おお。なんか凄そなものがでてきた。俺は不覚にもテンションが上がった。

しかし、魔導書という魅力的な書きと、禍々しい表紙とはうらはらに、彼女が開いたページは白紙だった。

「なんも書いてねーじゃん」

俺は、白いページをのぞきこみながら突っ込む。

だが実乃莉は、俺にかまわず魔導書のページを一枚ちぎって、宙へ放った。

「ナコト写本よ。クトゥルーの呼び声に応じよ。胸に輝くトラベゾヘドロンに誓つて、我に力を与えるんだよ！」

詠唱と同時に。

白紙のページは、瞬く間に巨大化する。

さらに、実乃莉が着ていた服は消失した。

代わりに白紙のページが、彼女の体を包んだ。黒い肉体が、紙面へ押しつけられる。

実乃莉を黒く染めていた俺の唾液は、たちまち、魔導書のページへと染みこんでいく。

無地だった魔道書のページに、女拓が完成した。

その途端。実乃莉は、まばゆい黒と白の光に包まれた。なにか大きな力と力が、融合しているようだった。

光が鎮まると、魔道書の断片はどこかに消えていた。

中から現れたのは、すっかり変身をとげた実乃莉の姿だった。ひらひらのドレス。

一回り大きくなったリボン。

そして、髪の毛が触手になっていた。

「覚悟するんだよ！」

実乃莉は、ナイトゴーントへ向け宣戦布告する。

「この竜殺しの氷剣【ヴォーパル・ソード】で、切り裂いてあげるんだから…！」

俺たちが隔離された、薄暗い空間に。実乃莉の啖呵が響きわたった。

彼女の右手には、二メートルほどの、巨大な氷の剣が握られている。

「わたしの邪技は、空気中の水分を凍らせて、武器を作り出すことなんだよ」

「それはすごいな」

まさか俺の幼なじみに、そんな技能があつたなんてしらなかつた。しかし今は、あれこれ詮索するよりも、目の前の敵を倒すことが先決だらう。

実乃莉のかくし芸に、託すしかないようだ。

「キュケエエエエエ！」

またしてもナイトゴーントは急降下する。狙いは実乃莉だ。一直線に向かっていく。

「えいっ！」

気合を込め、氷剣を振り下ろす。だが、少し遅い。

ナイトゴーントは旋回し、直撃を避けた。右の翼を切り落とされながらも、残った左の翼で反撃する。

バシッ、という激しい音をあげ。

実乃莉が後方に吹き飛ばされた。空中を一回転していく。その拍子に、氷剣はこなごなに砕け、ダイヤモンドダストになつた。

「実乃莉！」

「……わたしは、平氣だよ」

みごとに着地すると、実乃莉は言った。ダメージは浅いよつだ。一方、右の翼を切り落とされたナイトゴーントは、片翼をばたつかせていた。再度、飛ぼうとしているのだろう。

だが、いくら羽ばたいても、ヤツの体が舞うことはない。チャンスだ。飛行能力を失つたまなら、ヤツを仕留められる。でも、どうすればいい。俺の物理攻撃では、ヤツに致命傷を与えることはできない。かといって、実乃莉の氷剣は折れてしまつた。

なにかいい方法はないかと考える俺に、

「流しこむんだよ！」

実乃莉が、アドバイスした。

「おい。流しこむつて、何をだ？」

「太一の唾液だよ」

それはあれか。この「ウモリモビキ」、キスをしろつてことなか。

「なんで、そんなことをしなきゃならんのだ」

「太一に目覚めたクトゥルーの力で、あいつの邪な力を、相殺されるんだよ」

実乃莉の説明では、いまひとつ原理がわからなかつたが、とにかくキスさえすれば、この窮地を抜け出せるようだ。

俺は、幼馴染の言うことを信じた。

ナイトゴーントへ、正面から近づいていく。

対峙したとき、俺は、もうひとつ問題を発見した。

「キスをしろつたつてよ……。こいつ、顔が無いじゃねーか」

しかしだ。

こんなことで、キス神と呼ばれた俺を、とめられるわけがない。

それにさつきは、幼馴染にみすみす唇を奪われるという失態を、演じてしまつたからな。汚名返上だ。

俺は暴れるナイトゴーントを抱きかかえると、顔のない頭部に接吻した。

闇のように黒いヤツの頭部に、同じように黒い俺の唾液を流し込む。「コウモリもどきは俺の腕の中でバタバタと暴れた。ずいぶんとお転婆なヤツだ。

だが、俺の口づけからは逃れられない。

より深く、キスをする。なんとも言えない闇の味がした。濃厚で、むせ返るような死の香り。

俺は、喉が枯れるほど唾液を流し込んだ。はじめは暴れていたナイトゴーントも、徐々に力が抜け、ぐったりする。

ヤツの体からは、闇が消えていった。それと同時に、俺たちを隔てていた薄い暗がりも、晴れていく。

暗闇はなくなり、今まで通りの通学路に戻っていた。朝の喧騒がよみがえる。

ナイトゴーントは、俺の腕のなかで小さくなっていく。なにも映さなかつた頭部が、可愛らしい女の子の寝顔に変わった。

ヤツは、コウモリの姿から、女の子になった。

「よくやったね。太一」

振り返ると、実乃莉が俺に微笑みかけた。彼女は、いつも通りの格好に戻っている。

いつもの制服。いつものリボン。そして、いつもの髪の毛だ。
窮地は抜けたらしい。日常を取り戻したんだ。

ホツとするも束の間。

ふと、腕のなかで眠る女の子を見て思う。こんないたいけな子どもに、俺はティープ・キスをしていたのかと。

それは一線を超えたことではないだろうか。もし、その瞬間を目撃されていたとしたら、俺の人生は終わる。

「安心していいんだよ」

俺の不安を見ぬいた様子で、実乃莉はいった。

「さつきまでわたしたちを包んでいた暗闇はね、【少女悪夢】（アリスト・マリスト）って言うんだよ

「少女、悪夢、……」

「少女悪夢で起きていることは、悪夢のなかにいる人たちにしか見えないんだ」

つまり俺たちの戦いは、通行人からは見えなかつたということか。それなら安心だ。

とはいへ、少女悪夢から解放された通学路では、ぞろぞろと人が動きはじめている。こんなところで、いつまでも童女を抱いているわけにはいかない。

「おい。起きろ」

俺は童女を揺さぶる。起きる気配はまったくない。かすかに胸が起伏しているので、生きているのは確かだ。

彼女は、昏睡していた。

「まいっただな」

「とりあえず、救急車を呼ぼうよ」

「いいのかそれで」

さつきまで、「コウモリだつた奴だぞ。この子が昏睡する原因を、現代医学で解明できるとは思えないのだが。

「大丈夫だよ。おそらく、脳の障害つてことで対応してくれるよ」「なら、いいんだが」

他にいい方法があるわけでもない。ここは実乃莉の言つとおり、病院にまかせるのがベストだろう。

実乃莉がケータイをとりだし、119にかける。

「目の前で女の子が倒れたんです。病院までの搬送を、お願ひします」

テキパキとこなした。ふだんはボーッとしているくせに、いざといふ時は機転のきく奴だ。

その後、すぐに救急車が到着し、女の子は搬送されていった。

これで一件落着、になるのだろうか。

遠ざかっていくサイレンの音を聞きながら、俺は思った。まだまだ、未解決な問題がたくさんあるような気がする。

「ん？」

ふと足元を見ると、小さな箱が落ちていた。一辺が5センチほどの、古びた立方体だ。

さっきの女の子が落としたのかもしれない。俺は念のため拾いあげると、ポケットにしまった。

しかし今日は、朝から奇妙なことが立てつづけに起きている。バケモノに襲われたり、幼馴染が変身したり、バケモノが女の子に変わったり……。

それでも気が狂わず、理性を保つていられるのは、何事にも動じない強い心のおかげだな。俺はひそかに、強靭な精神力を自賛していた。だが。

「ねえ太一。今日からわたしは……」

実乃莉の発言が、ついに俺の平常心を打ち碎いた。

「あなたの、足になるよ」

な、なんだって！俺の足になるだと！？

それは一体どういう意味なんだ。俺は、その場で立ちすくんでしまふ。

「ほら。ボーッとしてないで。早く行かないと、学校、遅れちゃうんだよ」

先に、実乃莉が歩き出した。

彼女の後ろを、俺はあわてて追いかける。

完全に思考が止まつた状態で、金魚のフンのよろこび、実乃莉のあとについていくうちに。

ルルイエ学園に到着していた。

昇降口で靴を履きかえながら、実乃莉は訊く。

「ところで太一。さつき、何を拾つてたの？」

「……ああ。これだよ」

ポケットから、古く小さな箱をとりだす。さきほどは急いでいたのでよく見ていなかつたが、箱の表面には、模様が刻まれていた。星のマーク、いわゆる五芒星といつやつだ。

星の中央には、横に一本、傷が入つていて。

「あの子のものだろう。あとで届けてやるうと思つてな」

古びた箱をまじまじと見ながら、実乃莉が言つ。

「これは、あの子のものじゃないよ」

「なんでわかるんだ」

「とにかくこれは、太一が持つべき箱だよ」

一方的に押し返されてしまった。実乃莉はいつたい、何を知つているというんだ。

俺はしかたなく、箱をポケットにしまいなおしていると、

「よう、太一！ なにやってんだ」

背後から、ノーテンキな声が聞こえた。

陽気に肩をたたいてきたこの男。実乃莉と同じく、長い付き合いになる俺の悪友だ。

神世界 銀河という、アホみたいにスケールの大きい名を持つて

いる。

「いや、まあ。朝からいろいろあつてな」

「いろいろつて、あれか。実乃莉ちゃんと、エッチでもしたのか」
オヤジのようなことをいう。考える内容のスケールは、小さい男だった。

「ところで太一。さつきの箱は、何だ？」

「なんでもないよ」

「婚約指輪か？」

「ちげーよ。バカ野郎」

銀河の頭を小突いてやつた。奴はヘラヘラと笑つている。
まったく、俺は朝から修羅場をくぐり抜けてきたといつて。
「お前は、悩みごとがなさそうでいいよな」
「それがさあ。それでもないんだな」

銀河は、急に暗い表情になつた。

「俺の弟が、最近おかしいんだ」

うむ。失言だつたな。どんな人間にも悩みはあるもんだ。いくらバカな銀河とはいえ、悪いことを言つた。

「弟が、どうかしたのか」

「アニメのキャラに、ハマつてるんだ。恋をするほど」
「別にいいんじゃないか。今はそういうの、珍しくないだろ？」
「それがさ。毎晩毎晩、抱きまくらに向かつて、話しかけてるんだ」

抱きまくらか。それは、ビニヨーな一線だな。

銀河が不安になるのも無理からぬことだ。少し事例は違うが、俺も毎日、人形に話しかけるダメな男を知つていて。

俺からは良いアドバイスを受けられないと察した銀河は、実乃莉に話をふつた。

「実乃莉ちゃんは、どう思う?」

「構わないと思うよ。恋愛の形は、人それぞれだよ」

「あら寛大」

心の広い実乃莉の意見に、銀河は安心したようだった。憑き物が落ちたように、弟の事情を話しへじめる。

「じつは今日ね。キャラの中の人に、会いに行くんだって」

「つまり、声優のことか」

「そう。ファンクラブの特典で、握手会に参加するんだ。これで弟も少しずつ、現実を取り戻してくれたらいいんだけど」

取り戻す現実の先が声優というのも、また危なつかしい気がしないでもないが、それは言わないでおいた。他人の趣味をとやかく言うような野暮なことはしない。

「ふたりに相談してみてよかつたよ。ありがとう!」

銀河は満面の笑みを見せると、先に教室へ入っていく。俺からは気の効いたことを言つてやれなかつたが、奴の悩みは軽減されたようだ、何よりだ。

俺たちもすぐに、同じ教室に入る。

すると、実乃莉がそつと耳打ちしてきた。

「昼休みに、三階の会議室まで来てほしいんだよ
ん? 会議室だと。

あそこはたしか、うかがい知れない部活動の拠点になつていたはずだが。

名前は、えつと……。

だめだ。思い出せない。

実乃莉はそれ以上なにも言わず、自分の席へと向かう。なんどうう。どこか不穏な感じがする。

重要な話でも、あるのだろうか。

けつぎょく。午前中の授業は、実乃莉の発言が気になり、集中できなかつた。得意な数学も、あてられた問題を間違えるといつ、へマをやらかしてしまつた。

吃音のはげしい数学教師が言つ。

「め、珍しいですね。た、太一君が、ケ、ケアレスミスをするなんて」

おっしゃるとおりだ。俺は見かけによらず、細かい計算が得意だとこいつのに。

後ろの席からも、銀河がわざやいた。

「太一、悩みもあるのかよ」

「まあな」

「へえ。太一でも、悩むことがあるんだなあ」

銀河は、心底おどろいた様子だつた。

お前にだけは言われたくないと思つたが、今朝のことがある。それに、嫌味でいつているわけではなさそうなので、デコピンをするだけにとどめた。

集中力は戻らないまま、昼休みをむかえた。そそくせと弁当を食べ終えると、実乃莉に言われたとおり、会議室へと向かつ。三階の、いちばん西側にある部屋。ここが指定された会議室だ。

「邪魔するぞ」

「やあ、待つてたよ」

実乃莉が出迎える。室内には、彼女以外に一人の女生徒がいた。そのうちの一人が、俺が見るなり勢い良く立ち上がる。ドリルのような縦ロールにティアラを載せた、いかにもお嬢様といった出で立ちだ。

「たしか君は、となりのクラスの練環ねりわさ……」

「黙りなさいよ」

ものす」」い形相でさえぎつた。な、なんだつてんだ。

彼女は、釣り上がつた田で俺をにらむなり、憎悪をむき出しにして吐き捨てる。

「よくもまあ。わたくしの前に、のこのこと顔を出せたものですわ

「ええつ……」

絶句する俺に、悪魔のよつな一瞥を投げると。そのまま、奥の部屋へと入つていぐ。

取り付く島もなかつた。

「じめんね。佐美ちゃん、ちよつと機嫌悪いみたい」

実乃莉が代わりに詫びる。だがあの怒りかたは、『ちよつと機嫌悪い』どころじゃなかつたぞ。

「まあまあ、座つてよ。さつそく紹介するよ。じむじむの娘は、

学年がひとつ下の……」

「ボクは、佐藤くるみっス。よろしくっス！」

やたらと元気のよいあいせつだ。そういう子は、嫌いではなかつた。

くるみと名乗つた後輩は、短くまとめた髪に、ぶかぶかの黒いシリクハットかぶつていた。小柄でボーカルシユな風情なので、スマークをはいてなかつたら、少年だと見紛つといふだ。

「よろしくな！」

負けないように、俺も元気よくあいさつを返す。

「ところで。俺はなぜ、ここに呼ばれたんだ」

「あのね……。今から話すことは、すべて本当のことなの。だからね、真面目に聞いて欲しいんだよ」

急に改まる実乃莉。

俺としても、朝から超常現象に巻き込まれたんだ。ある程度、常識では通用しないことが起きていいのは、覚悟できている。

「実はね。今わたしたちがいる場所 地球、ひいては宇宙全体の領域。ここはね、【幻滅郷】モノトーンランドという、世界の一部に過ぎないんだよ。

そして、深い眠りの領域には、【幻夢郷】^{ワンダーランド}と呼ばれる、もう一つの場所があるんだよ

「それは、世界がふたつある、ということか？」

「厳密に言ひとね。大きな世界のなかに、小さなふたつの世界がある。そう考えてもらいたいんだよ」

「そのふたつが、幻滅郷と、幻夢郷

「うん」

「で。俺たちの世界と、その幻夢郷って場所に、何の関係があるんだ」

「今から百五十年くらい前にね。こちらの領域から、幻夢郷に渡つた男がいたんだよ。彼は幻夢郷に、ひとりの女の子を誕生させた。『何者でもあるが故に、何者でもなかつた』存在に、『アリス』つて名前をつけたんだよ」

アリスか。いい名前だな。

「彼はその後、すぐに幻夢郷を離れた。覚醒に生きる人間が、長くいられる場所じゃないからね。残されたアリスは、夢の国でのびのびと暮らしていた。仲間もたくさんできた。だけどね。楽しい時間は永遠には続かなかつたんだよ。　幻滅郷の人たちが、彼女を犯したから」

「犯したって、いうのは？」

「性的に、陵辱したんだよ」

実乃莉はそういうと、眉をひそめた。痛切な表情で話をつづける。
「アリスは、夢で暮らす女の子だから。人々が淫らな夢をみれば、彼女は犯されてしまうんだよ」

「それは、なんというか。気の毒だな」

「うん。それで、彼女の精神はおかしくなつてしまつた。でもね。もしかして彼女にいちばん酷いことをしたのは、幻夢郷の仲間かもしないんだよ。仲間たちはね、暴れて手の付けられなくなつたアリスを見捨て、この幻滅郷に亡命してきたんだよ」

そこまで話すと、実乃莉はうつむいた。言うべきことを整理する

ように、こめかみへ指をそえる。

少し悩んでから、顔を上げた。

「太一。わたしはね。その幻夢郷の住人だつたんだよ」

実乃莉と目が合つた。彼女は視線をそらさず、俺をまっすぐ見つめている。

「わたしだけじゃ、ないんだよ。くるみちゃんや、さつきの佐美ちゃんもそう。彼女たちも幻夢郷の住人」

嘘を言つてゐる瞳ではなかつた。そもそも実乃莉は、こんな誰も得しないウソをつくような奴ではない。

俺は戸惑いつつも、話のつづきを促した。

「それで、残されたアリスはどうなつたんだ」

「一人きりになつた彼女はね。復讐するため、ぬいぐるみたちを産み出したんだよ。名伏しがたい、グロテスクなぬいぐるみ。それは、遠い昔にこの宇宙を支配していた、邪神の復活を意味するんだよ」

「邪神の、復活……」

「そう。遙か太古、幻滅郷の宇宙は、邪神たちが支配していた。彼らは人間とは比べものにならないくらい、圧倒的な力を持つていたんだよ。だけど、星辰の運行によつて、深い淵に封印された」

実乃莉は、ふいに窓の外を見た。

空は青く晴れ、ゆるやかに白い雲が流れている。

「あの彼方に、星々をめぐつて邪神が蠢いてゐるシス。人の身からすれば、ちょっと想像しがたいシスよね」

くるみが、かぶつたままのシルクハットを、くるくると回しながら言つた。

確かに青空は、争いとは無縁といった様子で広がつてゐる。ここで話していることなんて、夢物語のようだ。

だが。

俺は空の青さよりも、幼馴染の言葉を信じることにした。

「話は理解したぜ。要は、夢の世界にいるアリス嬢ちゃんが、星を動かし、邪神を復活させ、俺たちのいる世界に復讐をはじめた。だ

から俺が、幻夢郷からきたお前たちと一緒に、邪神どもを倒す 。

そういうことだろ」

「うん。物分りがよくて助かるよ」

「実乃莉は満足そうにうなずいた。

「んで、気になることがあるんだが。今聞いた話と、俺の唾液が黒くなつたのは、関係あるのか?」

「いい質問ですねえ」

実乃莉は、人差し指を立てながら言った。

「今朝も言つたようにな。太一のなかには、クトゥルーつていう、邪神の魂が宿つてゐるんだよ。本来は、邪神と人間がキレイに融合するなんてありえないんだけどね。何者かのすぐれた魔術師によつて、太一は、クトゥルーと共存できているんだよ」

「邪神が、俺のなかにいるのか」

「それもどびつきりの奴がね。クトゥルーは水の神性を持つ、強力な邪神だよ」

「ほほう」

「ひとことで言えばね。すんつごく大きな、タコの神様なんだよ!」

「……弱そうじゃねえか」

強力なんじやなかつたのか。ショックだ。邪神つていうから、もつとカッコいいのを想像してゐたのに。

「まあいいさ」

俺は、話題を切り替える。

「とりあえずだ。他の邪神たちが、どこからくるのか知りたい。今朝みたいに、急に襲われたらたまらん」

「今朝のナイトゴーントはね、邪神ではないんだよ」

「そうなのか。いかにも邪な感じだつたけどな」

「邪には違ひないけどね。ナイトゴーントは、邪神の下僕みたいなもんだよ。邪神つていうのは、もつとこう……」

実乃莉が言いかけたとき。

ガターンッ。

ものすごい勢いで、くるみが立ち上がった。

震える指で、窓をさしながら叫ぶ。

「ああ、窓に窓に！」

「なに。もう来たのか？」

俺は身構えた。たあ、邪神とやりよ。

「かかって來い！」

だが。

窓から見えたのは、メガネをかけた女生徒だった。ふたつのお下

げを、水色のシュシュで留めている、地味目な女の子。

「あっ。あんなところにいたんだ」

実乃莉が、メガネ女に近づき、窓を開けながら紹介する。

「」の娘はね、潮 翔子ちゃん。くるみちゃんと、同じ学年なんだ

よ

「で、もしかして」

「察しの通り。彼女も、元・幻夢郷の住人だよ」

邪神どころか、味方だった。

俺が拍子抜けしていると、

「ブヒヤヒヤヒヤヒヤッ！ ひつかかつたッスね、太一さん！」

くるみが抱腹絶倒していた。

ただの、ドッキリだったようだ。

「かかって來い、とか言つちやつて！ 年下の女の子になに言つてんッスか。ヒーヒーッ」

「お前。笑いすぎだぞ」

このテンション、なんとかならないのか。女じやなかつたら殴つていたところだ。

翔子と呼ばれた娘も、声は立てないものの、口を最大限に歪ませニヤニヤしている。人の醜態を心から楽しんでいるようだ。

こういつ陰湿な笑い方のほうが、笑われる側としては辛い。

「太一、ごめんね。彼女たちは悪い娘じゃないんだよ。ただちょっと、悪ノリするだけで」

「なんとなく、幻夢郷がどんな所なのか、わかつた気がするぜ」「俺は深いため息をついた。

実乃莉が、はげますように肩を叩く。

「まあ、これから『コール・オブ・クトウルー部』として戦う仲間なんだからね。仲良くしようよ」

「ん? なんだその部は」

「わたしたちの、部活名だよ」

実乃莉は両腕を広げて言った。

「ここはね。クトゥルーに集いし八人の少女たちが、地球を守る。そして、幻夢郷の平和を取り戻す。名付けて『コール・オブ・クトウルー部』、だよ」

『「コール・オブ・クトゥルー部』なる活動に参加し、邪神を倒すことになった俺。なんでも、俺には、邪神の魂が込められているらしい。

ふだんから、俺は自分のことを神に近いなにかではないかと思つていたので、邪神を秘めていると打ち明けられても、さほど驚きはしなかつた。

今のところは、これといった変化は見あたらなかつたが。今朝だつていつもどおり、親父と妹に朝食をつくり、弁当まで用意したのだ。こんな家庭的な邪神は、世界中どこを探しても俺しかいないうづ。

もつとも。妹の蓮は、相変わらず、たこわさばかりを食べていた。兄がタコの神さまであることも知らずに、いい気なものだ。

ほぼ今まで通りではあるが、しいて変化があるとすれば、「テケリ・リ」と笑うバケモノが見えること。そしてバケモノが近づいたときに唾液が黒くなることくらいか。それらは別に、日常を脅かすほどの変化ではない。まだ邪神の活動は本格化していないのだろう。他に、気になることと言えば。

銀河の弟である、太陽の様子がおかしいことくらいか。

通学路の途中で会つた銀河は、弟の不穏な行動を報告する。昨晩、太陽が声優の握手会から帰つてきたのは深夜すぎ。家族になんの報告もなく、そのまま部屋に鍵をかけ閉じこもつたという。

「なんかさ。太陽の部屋から、朝までギシギシ音がしたんだ」

銀河は、肩をおとしながら言つた。

「あまり想像したくないんだけど。たぶん太陽の奴、夜が明けるまで、抱きまくらとハッスルしてたんだと思う」

「まあ、あれだ。好きな声優に会つて、テンションが上がりすぎたんだな」

「限度があるだろ。あいつ、風邪ひいたみたいで、今日は学校休んでるんだ」

「暴走してるな」

「まいったよ。バカは風邪をひかないって、いうの」「ひ

「バカだから、体調管理ができないて、風邪をひくんだろ？」「

銀河は何も答えず、がっくりとうなだれてしまつ。

弟の将来を憂いでいるのだろう。銀河は、ぼそりと呟いた。

「抱きまくらと交接して風邪をひく弟と、この先どう付きあえばいいかわからない」

銀河もなかなか大変そつだが。

俺は俺で、別の問題をかかえていた。

昼休み。四人の女生徒が集う会議室へ、足を運んだ俺に、

「あなたの顔なんて見たくない。わたくし、そう申したはずですわ」

練環佐美は、顔を見るなり毒を吐いてくる。読んでいた文庫本から目を上げた彼女は、縦ロールを指でこねくり回しながら俺をにらみつけてた。鋭い目付と、頭のうえにのせたティアラが、キランと光る。

なぜ俺を敵視するんだ。なにひとつ思い当たるふしがない。俺は、女にだけは恨まれない生き方をしてきたつもりなのに。

「ねーねー。佐美ちゃんは、なに読んでるの？」

気まずい空気をきりかえるように、実乃莉が話をふつた。

「研究しているのよ。魔導書についてね」

「魔導書がないと、わたしたち、幻滅郷で邪技を使えないもんね」

「そうよ。わたくしの研究成果あつてなんだから」

「ホント、佐美ちゃんには感謝してるよお」

実乃莉が挤むポーズをすると、佐美は満足そうに鼻息を荒めた。おだてられるのに弱いらしい。

うきうきした表情で、読んでいた本へ栄をはさむ佐美。タイトル

には、見たことのない文字が記されている。外国の書物なのだろう。本を閉じた佐美は、いつになくなめらかな舌で、実乃莉に話しあじめる。

「幻滅郷に来てから研究を怠らなかつたおかげで、いろんなことがわかつてきたわ。たとえば、あなたが所持している“ナコト写本”だけれど。あればね、人類が誕生するよりも前に書かれたものなのよ。ナコト写本には、最も古い神話が、図をまじえて説明されるらしいわ。さしづめ『図解・原初の神話』つてところね。一説によれば、ナコト写本は古代の北極圏から伝えられているそうだけれど……。人類誕生前に書かれていたなんて、いつたいどんな生命体が記した書物なのか、非常に興味があるわね」

佐美はひとりで、うんうんと頷いていた。周りとの温度差に気づいていないらしい。一気にまくしたてると、今度はくるみに向きなおる。

「それで、あなたの魔導書はね……」

「あ、ボクは興味ないッスよ」

さらりと言われてしまった。

佐美はがつかりした様子で、「そう」とつぶやいたきり、黙ってしまう。つまらなそうに、ふたたび文庫本を読みはじめた。感情の起伏がはげしいやつだ。おそらく、自分の好奇心だけを基準にして生きているのだろう。

実乃莉はとくに、くるみを見ながらほつぺたを膨らませていた。対するくるみは、シルクハットのつばをいじりながら悪びれた様子もなく口笛を吹く。

実乃莉が耳打ちする。佐美には聞かれないように、小声で話しあう声がもれる。

「ダメだよ、くるみちゃん。せっかく佐美ちゃんが機嫌よくなつたのに」

「だつて、興味ないッスもん」

「社交辞令を身につけないと、この世界では生きていけないとだよ。

ずっとお茶会やっているわけには、いかないんだから

実乃莉が説教をしている。だが、幻夢郷あがりの人間に、社交辞

令を教え込むのは難しいだろう。

ふたたび室内が気まずくなる。今度は俺から話をふった。
「お前たちさ。幻夢郷にいたんだり。その時の記憶つて、残つて
いるのか」

「残つてるんだよ」

実乃莉が、両手で胸をおさえながら答える。

「わたしは幻夢郷で、『バンダースナッチ』と呼ばれていたんだよ
「どんな奴なんだ」

「それはね……言えないんだよ」

イタズラっぽく笑つた。口元にえくぼができる。

俺は不覚にも、ドキッとしてしまつた。秘密の作り方が上手いや
つだ。

「太一さん。ボクはね、『マッドハッター』をやつてたツスよ！」

「ふうん。マッドってあたりが、くるみっぽいな」

でかいシルクハットの下で、ナチュラルハイに笑うくるみへ、素
直な感想を述べる。じゃつかん皮肉のつもりだったのだが、彼女は
気づいていないようだ。むしろ褒められた子どものように喜んでい
る。

俺は次に、メガネの娘に訊く。

「君は確か、翔子つて言つたよな。あつちでは何やつてたんだ」

「拙者は『チエシャ猫』だつたで、『じざる』

「ほ、ほう。チエシャ猫をねえ」

俺は曖昧にうなずいた。いつたいどんな猫なのかは見当つかない
が、それよりも、彼女の口調が気になつた。拙者？『じざる』？ 家
訓かなにかによるものだろうか。

「んで。佐美は、なにをやつていたんだ」

「ちょっと。軽々しく、呼ばないでほしいですわ」

「いいじゃねえか、呼び捨てでもよ。同じ年なんだし」

「呼び捨てかどうかは関係ないですわ。あなたに、名前を呼ばれることが耐えられませんの」

「ぐう。なんでこいつは、俺をそんなに罵るんだ。常に人を見下したような言い方しやがって。」

「佐美ちゃんはね、『ハンプティ・ダンプティ』をやつていたんだよ。幻夢郷でもね、すごく博識だつたんだよ」

「やっぱ、向こうでも本ばつか読んでたのか」

「そうだね。読書家だつたよ」

「その、博識の佐美さんに訊きたいんだけどよ。この前、実乃莉が持つっていたナコト写本とかいうやつ、ぜんぶ真っ白だつたぜ」

佐美は、文庫本から顔を上げない。徹底的にシカトする気だ。

「なあ、魔導書と呼ぶには、ちょっとパチもんくさくねーか」

「太一。それには、血塗られた歴史があるんだよ」

実乃莉が代わりに答えた。

「血塗られた、歴史？」

「うん。中世のころになるんだけどね。魔導書を使い、邪神たちの力を蘇らせようとした教団があつたんだよ。だけど、教会が彼らをまとめて弾圧した。大がかりな異教徒狩りによつて、たくさんの信者が血祭りに上げられたんだよ。そのときには、すべての魔導書は焚書されちゃつた」

「つてことは。いま手元にあるのは、偽物なのか」

俺の発言に、ついに佐美が反応する。

「失礼ね。偽物だなんて」

文庫本の端からにらんだ。どうも俺はさつきから、彼女の機嫌を損ねる言動ばかりをしていいよつだ。

俺を見つめる佐美の表情は、憎しみと蔑みに満ちている。

「レプリカと言つてちよつだい」

「似たようなもんじやねえの」

「いいこと。魔導書のレプリカはね、本物に劣らない魔力をもつているんですね。そして、この世界に現存するレプリカは、すべてわ

たくしの手によって再現されたんですねよ」「

崇めなさい、とばかりに彼女は胸をはつた。

「なるほど。よく、わかつたよ」

「わからばよろしくですわ」

「お前の胸は、えらく小さいことが

「なつ」

佐美は両腕を胸の前にクロスさせる。彼女の顔が赤くなっているのは、羞恥のためか、憤怒のためか。

おそらく、両方だろう。

「信じられませんわ！ わたくし、退席させていただきます」「机をバンッと叩いて、昨日と同じように奥の部屋に行ってしまった。

「……ちょっとした、ジョークのつもりだったんだけどよ」「いまのは、太一が悪いよ。完璧にセクハラだよ」

残った三人の女性陣は、冷ややかな目で俺を見ていた。

その日の夜。

俺は夕食を準備していた。今晚のメニューはカレーだ。俺のもつとも得意とするメニューである。なんてつたって、作るのが楽だからな。

だが俺は、手抜きをするのは嫌いだ。なにをするにも一手聞くわえたい。だからちやんと玉ねぎをみじん切りにして、しっかり炒めている。

フライパンの上で、徐々にきつね色となつていく玉ねぎを見るのは、けっこう気持ちのよいものだ。立ち上る匂いや、食材が焼ける音も心地いい。

料理とこつのは、食べるときの味覚だけでなく、五感で楽しむものなんだ。

「おい、太一！」

そんな俺の楽しみを、親父の怒鳴り声がぶち壊した。

「なんど言つたらわかるんだよお。メシの炊き方がなつてないぞ！」

「つぬせーよ」

「父さんは、柔らかめの米が好きだと言つてあるだろつー！」

「十分だろうがよ。これいじょつ柔らかくしたら、お粥になつちまうよ」

自分じゃ作らないくせに、いろいろと注文の多いやつだ。

だいたい、俺は硬めのご飯が好きなんだ。それを妥協して、親父に合わせた炊き方をしているのに。その上、文句をつけるなんてたまたもんじやない。

「不満なら、親父が料理すりやいいだろ？」

「それができたら苦労しないじゃない。父さんの料理ベタ、太一も知つてゐるでしょ？」

たしかに親父の料理は、殺人級に不味い。俺はいつも疑問に思つ。

「あんなに手先が器用なのに。なんで、料理がヘタなんだ」

「いやあ。父さんが作るのは、美しいもの限定だから」

「どういう意味だ？」

「ぬじものは、父さんの手の対象外なんだよなあ

「説明になつてねーよ」

「いやあ。悪い悪い」

親父は頭をかいだ。たいして悪びれた様子もなく、へらへらしている。

俺としては、親父に料理を覚えてもらいたい。そうすれば家事の負担がかなり減る。なんとか丸めこめないもんどうつか。炒め終えた玉ねぎを煮込みながら、俺は説得をはじめる。

「なあ親父。スペインの画家でよ、サルヴァドール・ダリつていただろう」

「あの、ショルレアリストの」

「そうそう。んで、ダリの言葉にこんなのがあるんだよ。【美とは

可食的なものであろう】ってな」

「父さん。それ聞いたことあるな」

「おっ。食いついた。これは押しきれるかもしねえ。」

「さつきの親父の発言を、くつがえす言葉だろう。やつぱ芸術家つてのは、食えるもん作れなきやダメなんだつて」

「そこ！ 太一の言いたいことはね、父さんもよくわかる。ダリの言葉を知つたとき、ああ父さん料理がんばらなきやなつて思つたのよ」

「がんばってねーじやん」

「だつてさ、太一。考えてみてよ。ダリの絵に書いてある、あんなグチャグチャしたものがさ、実際にあつたらとてもじやないけど食べられないでしょ。お腹こわしちやうよ」

「……でもよ。時計が溶けてる絵、あるじやん。あれなんかはぬじ

うだぜ」「

「じゃあ太一は、溶けた時計が食べたいの。うん？ なら父さん、明日から溶けた時計の料理だしてもいいよ。うん？」

顎をしゃくりあげ、親父は俺をのぞいてくる。すじくムカつく顔だつた。俺は鍋の取つ手をにぎりしめる。

だが悔しいことに、俺には言い返す言葉がない。親父のしゃくり上げた顎を見ながら思つ。まったく、食つことと屁理屈だけは、長けた口だぜ。

そこで、玄関からガチャッという音が聞こえた。蓮が帰ってきたのだろう。

「ただいま～」

やけに疲れた声で、蓮は言つた。ふらつきながら居間へ入ると、制服のままソファにダイブする。ラクロスの道具がその場に散らかつた。

「蓮。道具は大切にしろよ」

「だつて疲れちゃつたんだもん～」

ソファに顔をうずめた。

「大会が近くて。練習がハードなんだよお」

「疲れたのはわかつたから。早く起きろ。メシにするぞ」

ちょうど煮詰まつたカレーをよそいながら、俺は食卓へと並べていく。

「あ。レンは、たこわさだけでいいよ」

「だからそういう言つなつて。せっかく作ったんだから、食つてくれよ」

「でも、疲れすぎて食欲ないもん～」

「ちゃんとメシ食わねえと、力でないぞ。大会近いんだろ～」

「うい～」

気怠い声を出して、蓮はカレーを運んでいく。

すると、テレビにかじりついていた親父が言つた。

「いやあ、怖いね。誘拐だつてよお」

「ん。誰が？」

「声優さんなんだけどさ、昨日の握手会から行方がわからないんだつて」

ほらほらと、親父がテレビを指をしてくる。テレビではキャスターが事件を報道していた。

『 昨夜未明から、声優の乙さんが行方不明になっています。乙さんの行方がわからなくなつたのは、ファン限定による、イベントの直後ということです。警察では、熱狂的なファンによる誘拐とみて捜査を……』

「怖いよねえ。これ絶対、ファンの仕業だよ」

「そうかな。仕事が嫌で逃げただけかもしないぜ」

「いや、父さんにはわかるんだ。だってこの声優さんの声、獨り占めしたくなるくらい可愛いもの」

そして親父は、声優乙が担当しているアニメのキャラを列挙した。

「 “ の使い魔” のルイーザでしょ。 “ けちやチキ! ” の遠衛スバルでしょ。 “ かのわん ” の平ちずるでしょ。 “ だぶりゅうだぶりゅうつ! ” の石不動美緒でしょ……」

「 その年で、そんなに知っているお前も怖いよ」

「 あとね。最近はじまつた魔法少女の……」

「 もういいって」

親父にツッコミつつ、俺は夕食の準備を終える。リビングに濃厚なカレーの匂いがひろがった。

三人が各自の席につき、手をあわせた。

「 いただきます」

そして、いざ食べよとした瞬間。

ピリリリリリッ。

俺のケータイが鳴った。ディスプレイには『新世界銀河』とある。

「 こまからメシだつてのに、タイミングの悪い奴だな。」

「おひ、どうした」

「ヤバイことになつてゐるんだ！」

通話口から聞こえてきたのは、せつぱんまつた銀河の声だった。

「なにがあつたんだ」

「はやく！　はやく来てくれ」

「来てくれつたつて、どこにいるんだよ」

「ダニーチ公園！　たのむよ、もう俺一人じゃ……ああ！　もうダ
メ……」

「おい、銀河！　もしもし。もしもしつ！」

電話は、そこで切れていった。

「くそつ。何が起きてるつてんだ」

奴の様子は尋常ではなかつた。緊急事態であることは間違いない。

「ちよつと行つてくる」

俺は上着をとると、玄関へ向かつ。

親父が心配そうに訊いた。

「なにがあつたのかい？」

「よくわかんねえけどよ。とにかく、ヤバイことになつてゐるひじー

銀河はダニーチ公園にいるところをいた。その公園は、墓地にかこまれた寂れた場所で、人通りは極めて少ない。もしかしたら、大きな事件に巻き込まれてゐる可能性もある。急いだほうがいいだろう。

すぐに、家を出た。

公園に向かつて走る。

「銀河。無事でいてくれよ」

つぶやきが、夜景とともに俺の背後へと流れていった。

十分ほど走り続けて。

ようやく、ダーツ公園にたどり着いた。

公園には銀河の姿はなかつた。代わりに俺を待つていたのは、奴の弟である太陽だつた。

彼はあるうことか、外灯の薄明かりのしたで、抱きまくらにキスをしていた。

「……ヤバイって、このことかよ」

たしかに、ヤバイことはヤバイ。今の太陽は、とても人に見せられるものではなかつた。しかし、だからといって、あんな深刻な電話を寄越すこともないだろう。

「つたく。焦つて損したぜ」

俺が息切れした呼吸をととのえていると。

「太一さん。おつかれッス」

背後から、聞き覚えのある声した。振り向いた先には、巨大なシリクハットがあつた。

くるみだ。

「どうしたんだ。こんなところに」

「ボク、ここに近くに住んでるんッスよ。太一さんがものすごい形相で走つているのが見えたから、追いかけてきたッス」

「じゃあ、来るだけ無駄だぜ」

俺は太陽を指さして言つた。

「ここにいるのは、あそこで抱きまくらにキスしてる男だけだ」

「ありやまッス。邪神が現れたのかと思つて、翔子を呼んじやつたッスよ」

太陽を一瞥してから、くるみがストラップだらけの携帯を取り出

した。翔子への通信履歴が残つていて。

その直後、草むらの中から人影が走つてきた。

「ついに邪神が現れたでござるか？」

息を弾ませた翔子だった。

「残念だつたな。はずれだよ」

俺は翔子にも説明する。彼女はビックリした様子で太陽のほうを見ていた。まあ、急に呼びつけられてあんなものを見せられたら、誰だつてそんな顔になるわな。

「ここに邪神なんていやしない。いるのは俺たちと、あそこのカツブルだけだ」

「太一殿。なにを言つてゐるでござるか」

翔子は、分厚いメガネを押し上げながら言つた。

「あれこそ、邪神が憑依した姿でござるよ」

彼女の視線の先には、魔法少女らしきキャラが描かれた枕を抱く、太陽しかいない。

「そりやお前。いくらなんでも失礼だろ？」

「失礼もなにもないでござるよ」

「抱きまくらにキスしたくらいで、邪神だなんてよ。趣味がちょっと行き過ぎただけだつて」

「違うでござる。邪神が取り付いているのは、太陽くんのほうじゃなくて……」翔子は俺に向き直つた。「あの、抱きまくらのほうでござる」

「な、なに？」

「よく見るでござる。太陽くんの周りを、独特の闇が覆つていてるでござる。あれが、少女悪夢。アリス・マリス。幻滅郷と幻夢郷が、重なつた空間。邪神がこの世界に侵食してきた証拠でござる」

言われてみれば、はじめてナイトゴーンと戦つたときのような暗闇が、抱きまくらを中心に広がつていた。もともと外灯しかないうす暗い公園だから、気が付かなかつた。

「太陽くん……。彼とは、同じ中学だつたでござる。趣味があつてよく話したでござるが。しばらく見ない「ちこ」、一線を超えてしまつたようでござるな」

翔子は「ヤーヤーしながら太陽を見た。笑っている場合じゃないと思つたが。

「とにかくだ。翔子、あそこへのはじんなヤツなのか、教えてくれ」

「魔法少女のプリンド「」だ。悪魔を召喚して戦うといつ設定あり、我々の境遇と似ているで「」だ。ちなみにプリンは「お兄ちゃん」とセセセやく声がかわいいと評判になり、ナンバーワン妹キャラの称号をもつていて「」だ。でも実態は、魔法少女と謳つておきながら相手をナタで惨殺する武闘派で「」だ。

「いやいや。抱きまくらじやねーよ。邪神のほう

「これは失礼」

翔子はまた、メガネを押し上げた。そつとフレンズが重いようだ。

「拙者、オタクでござるからな」

「だからお前、そんなしゃべり方なのか

「そうで「」だ。何をやるにせよ、成り切る覚悟が必要で「」だらな

「ヤーヤ」と笑う。成り切る覚悟もなにも、今時、「」だの口調はな

いだろ「」。

「つて。そんなことはどうでもいいんだって。抱きまくらに憑依した邪神は、何者なんだ」

「“ツアトウグア”で「」だ

「詳しく教えてくれ」

「この世界には、物質を成り立たせる要素として“四大元素”と呼ばれるものがあるで「」だ。『水・風・火・土』」

「そういや、実乃莉が言つていたな。クトゥルーは水の神性を持つつて」

「そのとおりで「」だ。邪神のなかには、四大元素の神性を司るものがいるで「」だ。そしてツアトウグアは、“土”に該当する邪神で「」だ

翔子の説明が終わるころ。

魔法少女・プリンは、ヒキガエルのような巨体に変わっていた。耳が裂け、氣だるそうな赤い瞳をこちらへ向けている。

だが、完全な憑依は終わっていないらしい。体の一部からは泥のような液体を垂れ流している。プリンの体をコントロールしきれず、ちぐはぐな動きをくり返す。

奴を覆っている暗闇が、激しくぶれていた。少女悪夢が安定しないようだ。

「ふたつの世界が融合しきる前に。ボクたちも、戦闘態勢をとるッス」

「では、まずは、拙者からお願ひするで」

翔子が俺の前に立つた。
そうだった。彼女たちを変身させるためには、キスをしなくてはならないんだ。

翔子には心の準備はできているようで、顔を上に向けている。アヒルのようにすぼめられた厚い唇。すうっと通った鼻筋。レンズでよく見えないが、細められた瞳は凜々しい。

近くで見ると、彼女は美しい顔立ちをしていることがわかった。お約束通り、メガネをとつたら美少女なのだろう。

「失礼するぞ」

はじめて気づいた翔子の可愛さに軽くためらいながらも、俺は唇を接触させた。だが浅いキスでは足りない。彼女を変身させるには、ここから唾液を送り込む必要がある。俺は舌を出し、翔子の口内に侵入させた。

ふたつの舌が絡みあう。

「ん……」

翔子の悶えるような呼吸。俺の唾液が、彼女の喉を下りていく。じわじわと、翔子の体が黒く染まつた。

「次は、ボクの番ッスね」

勢い良く、くるみが俺に抱きついてきた。背が小さいため、唇の位置を合わせようとすると、どうしても彼女の爪先が浮いてしまう。

俺は支えるようにして、くるみの背中に手を回した。

おちやらけた雰囲気と、大きなシルクハットのせいで目立たなかつたが。くるみもやはり、近くで見ると美少女の類であった。少し中心に寄つた顔のパーツが幼さを残してはいたが、シルクハットのつばで翳つた大きな瞳は、アルカイックな雰囲気を秘めている。ふたつの時間が同時に流れているような彼女の顔立ちは、倒錯的な色香があった。

にもかかわらず、加減も知らずに突きだした唇は、やはりあどけない。餌をせがむ小鳥のようにいじらしい唇へ、俺はキスをした。

「はうう……」

くるみは蕩けるような瞳で、送りこまれた唾液を嚥下する。地面に着地させても、宙に浮いているようにポーツとしていた。彼女の皮膚が黒く染まつていいくなか、頬だけは、最後まで朱色だった。

「なんか、ぽわ～っとするツス」

キスを終えた彼女たちが言つ。

「はあ。太一殿との接吻は、いいものでござるな」

フツ。これがキス神と呼ばれた俺の、真の実力よ。

しかし、今はそんなところに力を発揮している場合ではない。戦うべきは太陽に取り付いた邪神・ツアトウグアではないか。俺は、まだ呆けている彼女たちに言つ。

「早く変身しろよ」

「……頭が、溶けそうでござるなあ」

「俺のキスでいいなら、後でいくらでもやってやるからー。」

その言葉で、彼女たちは我に返る。

「ほ、本当にござるな」

ポケットからそれぞれの魔導書を取り出した。

白紙のページ一枚、破つて宙へと放る。

「無名祭祀書よ。クトゥルーの呼び声に応じよ。胸に輝くトラペゾヘドロンに誓つて、我に力を与えるでござる」

「屍食教典儀よ。クトゥルーの呼び声に応じよ。胸に輝くトラペゾ

ヘドロンに誓つて、我に力を与えるツス」

詠唱と同時に、彼女たちの衣服は消える。瞬く間に巨大化する白

紙のページ。ふたりの黒い体を包んだ。

俺の唾液が、魔導書のページへ染みこんでいく。
くるみ。翔子。

ふたりの女拓が完成する。

彼女たちは白と黒の光に包まれて見えなくなる。ふたたび視界が
晴れたとき、そこに立っていたのは。

髪の毛が触手になつた、翔子とくるみだ。

変身完了。

戦闘の準備は整つた。

「あんたたちさあ。とつぜん出てきて、なんなわけ?」

太陽が俺たちをみて言つ。奴はすっかり正氣を失つていて。狂氣に満ちた目で、涎をまき散らしながら叫んだ。

「僕とプリンの時間を、奪わないでほしいんだよね!」

「太陽。お前、いいかげん……」

俺が説得しかけたところで、

「ツアトゥグアのやつ、能力を発動したツス!」

くるみが叫ぶ。見ると、ツアトゥグアの周りにはボコボコと土の柱が現れる。ただの土の塊は徐々に形を変え、人に近い姿となつていく。胎児からの発育を見せられているような生々しい映像を前にして、さすがの俺たちにも緊張感が走る。

「フハハハハハ! 我が邪技、食らうがいい

もはや原型をとどめず異形となつた魔法少女・プリンが吼えた。

「土人形遊戯【ゴーレムダンス】!」

ヤツの声に反応して、土人形が最後の発育を終える。完成した土人形は、ツアトゥグアが憑依する前の、プリンの姿になつていた。金髪ツインテールのフワロリファツション娘が、約二十体。俺たちへにじり寄りながら、いつせいに「お兄ちゃん、だーい好き」と嬌声を上げている。

異様な光景だ。

「敵さんも趣味が悪いぜ」

「そうでござるか。拙者は、テンショングがあがるでござるが」

翔子はオタク心がうずくのだろう。今までにないほどニヤニヤしている。

「まったく。悪夢つてのは、悪趣味な夢つてことみてえだな

「太一さん。くるツスよ!」

土人形どもがいっせいに襲つてくる。「お兄ちゃん」「お兄ちゃん

ん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」

「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」……。

甘つたるい声を出しながら、飛びかかる。

俺は迫りくるプリンたちを丸腰で迎撃する。女を殴るにはこせとか抵抗があつたが、相手はアニメキャラを模した土人形だ。このさう構うまい。

人形どもの動きはにぶく、また脆い。たつた一撃くらわせただけで崩れる。

「どうやら、俺の敵ではないみたいだな」

すべて撃退し終えた俺は、公園に点在する土の塊を見渡して言った。

だが。

「その程度で、仕留めた氣になるな。クトゥルーと人の雑種よ」プリンに寄生したヴァトゥグアが言うと、崩れたはずの土がまたしても蠢きだした。土片はぬるぬるとナメクジのように這いまわり、またしても魔法少女の形となる。

しかも今度は、全員がナタを持っている。

右手に握られた鈍い刃物をみて、俺は思つ。さすがに丸腰で敵う相手ではなさそうだ。

武器を手にしたものの、プリンたちは完全に固まつておらず、動きがのろかつた。倒すなら今しかない。

「ちょっと待つたツス！」

くるみが、俺の前に出て身構えた。

「ここは、ボクの力を見せるときツスよ」

「大丈夫なのか。相手はナタ持ちだぞ」

「平気ツス。太一さんはそこで見ててくださいツス」

くるみは俺を制して、仁王立ちになる。反り返つたまま上着の裾をまくり上げた。

「邪技・臍で茶を沸かす【マツド・ティーパーティー】！」

へそ出しルックになり、技名を叫ぶと、

「ギャハハハハハッ！ オエツオエツ！ ヒーヒーツ！」

大笑いをはじめた。

夜の公園に、くるみの笑い声が轟いていく。

「ヒーヒーツ！ ボ、ボクの技は、大笑いすることで……ギャハハハッ！ へ、へその周りにある空気中の水分を、ふ、フハッ！ フハッ！」

「なるほど、解った」

俺は、くるみの解説を引き継いだ。

「お前の能力は、笑うことで熱湯を作り出すんだな」

「そ、そうツス！」

笑いすぎで目に涙を貯めている。見た目はマヌケだつたが、くるみの周りからはじわじわと蒸気が立ち上つてくる。お湯が湧きはじめたようだ。溜まつた涙も蒸発し、目元で塩になつた。

「さあ、食らいやがれツス」

膣で沸かしたお湯を土人形に放つ。熱湯が弧を描いて、プリンを模つた人形の手足にかかる。

しかし、効果が浅い。くるみの熱湯は、土人形の一部を溶かすだけで、いまひとつダメージを与えていなかつた。

「アーハッハッハ！」

新しく響きわたつた笑い声は、太陽のものだつた。俺たちの戦いぶりを見て大笑している。

「僕のプリンには、効いてないようだねえ」

「太陽！ お前いいかげん、目を覚ませよ」

「やだなあ。なにを言つてるんだか。僕とプリンはこんなに愛し合つてゐるんだ。だからプリンはこうして、三次元まで会いに來てくれたんじゃないのか」

ヒキガエルのように浮腫んだプリンを抱き寄せる。

「それは違うぞ、太一。愛とかそういうんじゃないんだ」

「嫉妬ですか。見苦しい」

太陽はクツクツクと笑う。ちくしょう。話が噛み合わないな。ど

この世界に、抱きまくらへ恋する男に嫉妬するやつがいるんだよ。
とはいって、今は事情を説明している暇はない。どのみち太陽を説得したところで状況はかわらないのだ。

俺は土人形の群れに向き直る。ナタを持ったプリンが、完成しようとしていた。

「なめてもらっちゃ困るッス。ボクの本当の力は、これからッスよ」
くるみがシルクハットの中から、ヤカンとティーカップを取り出した。何を思ったのか。先ほどのお湯で、お茶を淹れはじめた。

「おい。茶なんて飲んでる場合かよ」

「心配いらないッスよ、太一さん。これこそボクの真の力ッス」

「真の力……」

「幻夢郷での狂つたお茶会を、再現するッス！」

くるみは眞そうに淹れたての茶を飲んだ。がぶ飲みだ。
その途端。

彼女の全身が、またたく間に躍動していく。すべての肉が筋肉に変わったように、硬く盛り上がっていた。つるべただつた体型は激変し、完全にアスリートの体格となつた。

自慢気に、上腕二頭筋へコブを作つたくるみ。まさに小さな巨人だった。

「幻夢郷じこみのお茶には、ボクをパワーアップさせる効果がある
ッス」

ギヤハハハハハッ！ くるみはまたしても大笑いした。だが今回は、いつもの理由のないバカ笑いとは違つていた。

「圧倒的な力の差を確信した、不敵な笑みであつた。

「さあ。狂つたお茶会へ、ようこそッス」

くるみが暴れる。本人が言つたとおり、身体能力はいちじるしく向上しているようだ。

バツグンの破壊力で、土人形を粉碎する。

くるみの笑い声は止まらない。ギヤハハハハハッ！ 人形をすべて破壊したというのに、まだ笑つている。

「そこのチビ筋肉娘。やるじゃないか。だがな、そいつらは何度だつてよみがえるぜ」

太陽が右腕をかかげ、パチンと指を鳴らした。

またしても泥がナメクジのようになにかだす。

これじゃ、きりがないぞ。

「ちょっと待つでござる」

今度は翔子が俺の前に出た。

「拙者のこと、忘れてもらつちや困るでござるよ」

太陽のまづへまづくつと近づいていく。翔子はほくそ笑みながら言つた。

「 邪技・神出鬼没の艶笑【キヤットウォーム】」

「なつ、なんだよそれ」

「お主の体に、ちょっとした細工をさせてもらつたでござる」

口を最大までひろげて、ニヤニヤと笑つた。

「太陽殿。お主の体は、『DHMO』に侵されているでござる」

「D……？ だからなんだよ…」

「正式名称、ジハイドロジエン Dihydrogen モノオキサイド Monoxyde……。略し

てDHMO。この物質の特徴をざつと挙げると。これは、水酸の一種で酸性雨の主成分でござる。腐食を進行させ錆びつかせるでござる。残酷な動物実験に使われているでござる。悪性の腫瘍からも検出されるでござる。地形を侵食し地図を描きかえる力を持つでござる。そして、この物質を摂取したものは。必ず、死ぬでござる」

翔子のメガネが鈍く光つた。ニヤニヤと、陰湿な笑いをつづけている。

少女悪夢が生んだ薄闇のなかで、太陽の顔がこわばつた。

「そ、そんな危ないもの、僕に流し込んだのか！」

「 そうでござる。もつとも、DHMOの一般的な名称というのは。

……ただの“水”でござるが」

静かに肩をふるわせて忍び笑つ。

「ジョーク。でござるよ」

「な、なんだよ……」

「しかしまあ、太陽殿。水というのは、実に多様なものでござるな。人体にとつては都合良くも、悪くもなるでござる。拙者の邪技・キヤツトウォームは、その水のあり方を、限定的に変えられるでござるよ。たとえば、『こんなふうに』

翔子は胸の前からぐるりと両腕をひろげる。その先には、再生を試みる崩れた土人形たちがいた。だが、いつまでたつても固まらない。

柔らかい土はちぐはぐに絡まっていた。肘のあたりに胸があつたり、頭の先から足がはえたりと、とても人体とは思えない形状になつていて。

「土人形に含まれる水分を、油に変えさせてもらつたでござる。油は水に比べて乾燥しにくいでござるからな。なかなか固まらないでござるよ」

にやつく翔子。

公園を走りまわりながら笑うくるみ。

ふてぶてしく笑う彼女たちを見て、俺は思った。
強い。

幻夢郷の力、恐るべしだ。

「どーーーんなもんだいッスよおおおお」
勝利の余韻にひたつてゐるんだらつ。くるみが焦点の合わない目
を泳がせながら言つ。まだ紅茶の効果が切れていないようで、筋肉
隆々のテンションMAX状態だ。

「よくやつたぞ、くるみ」

俺は素直に感心してゐた。しかし彼女は聞く耳をもたず、
「まだまだやれるッスよおおおおおー」
と、暴れている。

「いや、もういいんだ。お前の出番は終わつた」

「ボクのかちゅやくは、これからッスよおおおおお」

それつの回らない口調で、わめき散らすくるみ。血管の浮き出た
腕をふり回している。

「くるみ殿。拙者たちの役目は終わつたでござる。あとは太一殿に
まか……」

「おみやーは、ひつこんでろッスううう！」

なだめるために近づいた翔子を、全力でふつ飛ばした。翔子はゴ
ロゴロと十メートルほど転がり、うつぶせの状態で止まる。ピクリ
とも動かない。どうやら、気を失つてゐるようだ。

殴つたくるみも、ほとんど意識を失つてゐるようだ。千鳥足のま
ま公園内をふらつゝてゐる。いつたい、あの紅茶には何が入つてい
たんだらつ。くるみは前後不覚のまま遊具に激突すると、翔子に覆
いかぶさるようにして倒れた。
ふたりとも動かなくなつた。

「なにやつてんだよ」

めずらじく褒めてみたら、この有様だ。

まあいい。お前たちはよくやつた。

ここからは、俺の仕事だからな。

イボだらけに肥大化したプリンと向き合つ。少女悪夢のせいであらに暗くなつた闇のなか、あいつに憑依した邪神を追い払つため、俺は今からキスをする。

「俺がその悪夢、目覚ませてやる」
唾液を流し込み、ツアトゥグアの力を相殺せれば、ゲームセットだ。

しかしここで伏兵が入る。

太陽が、俺とツアトゥグアの間に立つた。

「僕たちの愛を邪魔するやつは、許さないからな！」

「いやや。愛つていうけどよ。そもそもあれは、抱きまくらなんだぞ」

「そんなこと関係ない！」

太陽はその場に崩れ落ちる。地面に何度も何度も、頭を叩きつながら叫んだ。

「僕はプリンが好きで好きでしようがないんだ大好きなんだ世界でいちばん愛しているんだ！何の取り柄もなくていじめられて家族にも疎まれていてる僕にはもうプリンしか信じられるものがないんだよ。僕にはプリンを愛する以外になにもないんだ。だからいつもプリンのことを考えているしつもプリンだけを見ているんだ。そしたらとつぜん僕の抱きまくらが動き出したんだ。本当にあつたんだよこんなエロゲみたいな展開。ついに僕の愛が一次元に通じたんだ！」

額から血を飛び散らせながら、太陽は頭を叩きつける。

本当は彼も、うすうす気づいているのだろう。愛で抱きまくらが動き出すわけはない。自分の頭がおかしくなつたのかもといつ、理性が働いているようだ。

「通じたんだ……通じたんだ……」

それでも太陽は、自分の愛が通じたと信じこむため、必死に頭を叩きつけている。

「あのな。太陽。じつは……」

「うるさい！ 誰がなんと言おうとやつぱり僕だけがプリンにと

つて本当のお兄ちゃんだ！プリンはずっと僕にだけ向けて「お兄ちゃん」と呼んでくれたんだ！」

「どうして、こんなになるまで放つておいたんだ？」

あまりにも一方的で、独占的すぎる太陽の告白。

俺は言葉を失ってしまう。

太陽は涎を撒き散らしながら、それでもプリンへの愛を説きつづけている。

もう太陽には、周りが見えていないのだろう。「うつぶせになりながら、大地に向かつて叫ぶ。

「だけどある時プリンにキスする僕へ兄さんが言った。「おい太陽、これはただの絵だぞ」。だけど、それがどうしたっていうんだ。僕にとって重要なのはプリンが絵だとデータとかそういう問題じゃないんだよ。僕はただプリンがそばにいることを感じられればいいんだ。プリンが僕のなかに生きていると感じられたらそれだけで幸せなんだよ。じゃあ逆に言わせてもらひうけどね。僕たち人間だって生命を創りだした神によってプログラムされたCGみたいなもんじやないの！」

「たしかに。俺たちはCGかもしだねえな」

俺の言葉に、ようやく太陽が反応する。

血と涎と泥にまみれた顔を上げた。

「いま、なんて……」

「俺たちは、神にプログラムされているCG。それは認めるよ」

「なら、僕は……」

「だけどよ。その神が正しいなんて保証は、どこにもないんだぜ」

俺は太陽の顔を、袖でぬぐつてやる。

「人間ってやつは、運命を自分で書きかえられんだ。お前は下手くそな神のシナリオに振り回されただけだ。そんなもの、全部リライトしてやううぜ」

「リライト……？」

「ああ。お前ならできるさ」

俺は太陽の肩を抱いた。頼るものもなく、妄想にすがり続けた男の肩は、小さく震えていた。

なんて、盛り上がるシーンなんだ。

運命はリライトできる。自分で言つて、ちょっと感動してしまつたぞ。

だが。

俺らをみていたツアトウグアが、退屈そうに言つ。

「茶番はそのくらいにして欲しいんだよねえ」

「なんだよお前。まだいたのかよ」

「ちょっと失礼じゃん。それなのに、下手なシナリオつて。誰のこ

となの。ねえ」

「自覚あるなら黙つたらどうだ、ヒキガエル野郎」

俺はツアトウグアに殴りかかった。

動きがのろい。ヤツは微動だにすることなく俺の拳を受ける。

クリティカルヒットだ。

鳩尾にめり込んだパンチで、ツアトウグアはその場に崩れ落ちる。殴つた瞬間、何かが破裂する感触があつた。ツアトウグアの古くなつたゴムみたいな腹ではなく、生々しい手応えだった。最近の抱きまくらは、こんなにリアルに作られているのか。

轢かれた力エルみたいな体勢で、動かなくなつたツアトウグア。

ヤツの体を抱き上げながら、俺は太陽を振り返る。

「さあ。いまから、お前の新章がはじまるぜ」

俺はツアトゥグアにキスをした。クトゥルーの力で、ヤツを相殺させてやる。

そして、太陽の目を覚ませてやるんだ。

潰れたカエルみたいな顔のツアトゥグアへ、唇を押し付ける。やたらと生臭い口のなかへ舌を入れた。ザラザラとした感触が伝わってくる。無数の小さな毛虫が、一斉に流れこんでくるようだった。だがヤツの抵抗も一瞬だけだ。

俺の唾液を飲み込んだツアトゥグアは、断末魔の悲鳴をあげる。

「く……くそお……」

腕のなかで悶えるツアトゥグア。苦しげな声が聞こえる。

「これで……俺たちに勝つたと思うなよ。四大元素を司る邪神たちは……すでにこちらへ向かっている」

「ふん。なんでもこいよ。歓迎するぜ」

「強がつていられるのも……今のうちだ。……奴らは強い。なんせ俺は……四天王のなかでも最弱……」

「自分でいうなよ」

俺はツアトゥグアを突き飛ばす。抱きまくらは鈍い音をたてて地面に倒れた。印刷されたプリンはまだ耳が尖っていたものの、ほとんど元の魔法少女に戻っている。

勝負はついたも当然だ。

一匹目の邪神討伐は上手くいったようだ。約一ヶ、途中リタイアした奴がいるが初陣にしてはよくやつた方だろう。

しかしあれだな。抱きまくらにキスをしたのは初めてだったが、悪くないもんだな。ぜんぜん、作り物にしている感覚はなかつた。太陽がハマつてしまふのもわかる気がする。

そんなことを考えていると。

フーッ。フーッ。

抱まくらから、かすかに呼吸音が聞こえてきた。

「ちつ。ツアトウグアもしつこ……」

俺は、抱まくらを見下ろし毒づく。そしてあることこの間にがついた。

抱まくらから、血が染み出していたのだ。真っ赤な鮮血。ツアトウグアのものではなさそうだ。

「つて、ことは。まさか！」

抱まくらを持ち上げると、カバーをはずす。詰め込まれた本体の代わりに入っていたのは、

生身の女性だった。

「うつ」

思わず、えずいてしまひ。まさかこの女性は。

「誘拐された声優ですよ。ニコースでやつてたでしょ」

「お前が、やつたのか」

ふらりと立ち上がる太陽へ、俺は訊いた。

「もちろんそうですよ。プリンを完全にするためには、必要なことでしたから」

さも当然とばかりに言ひ。

「中の人は、必要でしょ」

彼に悪びれた様子はなかつた。確信犯だつた。好きなキャラの抱きまくらには、声優が入つていて当然と言いたげな口調だつた。

すると、背後から震える声がした。

「太陽……なにやつてんだよお……」

銀河だつた。やつは公園の隅に隠れていたようだ。

ちょうど少女悪夢からは離れた場所なので、俺たちの戦いは見えていなかつたようだ。

銀河は震える声で言つ。

「お前のようすがあまりにも不気味だつたから、兄ちゃん。ずっと隠れてみていたんだ。そしたら、太一や女の子が来たところで、急に見えなくなつて。ずっと心配してたんだぞ」

太陽のもとへ、銀河が歩み寄る。

「しばらく見てたら、いきなり女の子がふたり飛び出してきて、その場に倒れちゃうし。俺、なにがなんだかわからなくて……。それで、やつと太陽の姿が見えたと思つたら……」

抱きまくらの中に閉じ込められた、声優を見下ろした。

「声優を誘拐するとか、お前。これはダメだよ」

「僕の愛を完成させるには、必要な材料だつたから」

太陽は真剣な顔で言つた。たいする銀河は、今にも泣き出しそうな顔で抱きついた。

「「めんな。兄ちゃんが、お前の趣味わかつてやらないばっかりに。俺さ、お前のこと理解できるよう努力してみるよ。いつしょにアニメを見よ」」

「兄さん……」

「でも、その前に警察に行かないとな。人を誘拐したんだから、その罪は償わないと」

「……やはり。あなたは何もわかつていない」

銀河の体をぐいっと引き離すと。

太陽は、背中からナタを取り出した。プリンのコスプレ用に持つていたのだろう。太陽はナタを振り上げる。

「死んでください」

ナタを振り下ろした。

なにかの冗談かと思った。

しかし、ナタは本物で、銀河の脳天に食い込んだ。

血しぶきが、スプリンクラーのように噴き出した。崩れた頭部から、脳梁をしたたらせながら、銀河はその場に倒れた。

「冗談……じゃないのか。これは。

「あーあ。とんだ邪魔が入っちゃったなあ」

太陽は血まみれのナタをぶら下げながら、俺をみた。

「まあいいや。本番はここからだから。ねえ、太一さん。あなた言いましたよね。自分の手でシナリオを書き換えると」

「あ、ああ……」

「僕はね書き換えますよ。自分のシナリオを、サロメにするんです」「サロメ？」

「知っているでしょう。オスカー・ワイルドの戯曲です。『ダヤ王ヘロデの姪であるサロメは、愛する洗礼者ヨハネの首を欲しがった。彼女は切り落としたヨハネの生首に、口づけたことを咎められ、殺されてしまうんです』

「まさか、お前……」

太陽はふらふらと、プリンの抱きまくらに近づいていく。

ふいに、俺たちの周りの空間が、やけに暗いことに気づいた。少女悪夢だ。ツアトウグアの力は、完全には消えていない。

「僕はサロメに憧れていたんですよ。だつてそうでしょう。なんですよ。愛する人に口づけた、その罪で死ねる。それって素晴らしいことじやないですか」

またしても、ナタを振り上げる。ツアトウグアの最後の力なのだろう。グチャグチャに歪んだ土人形が、もたつきながら、太陽の周りを囲つている。

ほとんど意志を失った土人形は、太陽を敵と判断しているようだ。主のツアトウグアに危害を加えようものなら、反撃するだろう。いくら瀕死とはいえ、邪神の力を普通の人間が受けて無事なはずがない。

「太陽。やめろ」

「カーテン・コールですよ。さようなら」

ナタを振り下ろした。太陽は、抱きまくらの首を、声優ごと切り落とした。

首をひろいあげ、太陽がキスをする。

その途端、周りを囲つていた土人形が、いっせいに崩れかかっていった。

シユウウウウウ。

少女悪夢が晴れていく。

ツアトウグアの気配は完全に消えていた。

そして抱きまくらも。太陽も。銀河も。

「おいーどこに行つたんだ。銀河！ 太陽！」

俺はやつらの名前を呼んだ。

すると。

背後に人影を感じた。

振り返ると、そこには、息を切らした実乃莉がいた。

「なにか、嫌な予感がしたんだよ」

「実乃莉……」

「邪神が現れたみたいだね。でも、さすが太一。いきなり倒したんだよ」

「そんなことよりもよ。いなくなつちました」

「誰が？」

「銀河だよ。それに、太陽も」

俺がいつと、実乃莉はきょとんとした顔でいつた。

「銀河……。それって、誰のこと？」

ふざけている様子はない。

「なに言つてんだ。銀河だつて、銀河。いつもいつしょに登校してたじやねーか」

「……ああ。太一の友達なんだよね」

「今さら何なんだ。実乃莉、とぼけているのか」

「ごめんね。銀河くんつて人のこと、わたしはもう、思い出せないんだよ」

実乃莉は夜空を見上げながら言つた。

「そういう天然は、正直いつて笑えねーぞ」

「あのね。少女悪夢の中で死んだ生き物の情報は、すべて消えちゃうんだよ。その生物が死んだ瞬間、少女悪夢のなかにいた人の記憶以外からは、ぜんぶ」

「じゃあ、なんだ。銀河や太陽のことは、あのとき少女悪夢の中にいた、俺しか覚えてないってことなのか」「そういうことになるんだよ」

実乃莉は申し訳なさそうに頭をさげる。

「ごめんね。誰かが死ぬなんて、わたしも考えてなかつたんだよ。だから、あえて言わなかつたんだけど」

そのことを今さら責める気はない。ただ俺としては、銀河の存在がこの世から丸々消えてしまつたことが信じられなかつた。

「いやいや。やつぱり実乃莉の冗談なんだろう。ここ最近、ガチで冗談みたいなことが起きすぎてるからな。ツツ」「ミミどころを失つちまつたぜ。銀河みたいな悪友、忘れてくとも忘れらんねえよ。な、実乃莉だつて覚えてるんだわ」

「ごめんね」

「おい。最近だつてお前、弟の相談に乗つてたじやねえか。その弟は太陽つてんだ。知つてるはずだぜ。思い出してくれよ」

「……太一。ホントに『めんなんだよ。わたしには、もう、なにも思い出せないよ』

『冗談を言つている顔ではない。

彼らの記憶は、俺以外の人間から消えてしまったようだ。
俺は地面に両膝をついた。神になつたと浮かれていた自分がバカらしくなつた。

身近にいる、大切な友人すら守れなかつたというのに。
なにも考えられなくなり、真っ白になつた頭の中で。

ふと。戦う前につぶやいた、翔子の言葉がリフレインした。

『何をやるにせよ、成り切る覚悟が必要でござる』

俺がクトゥルーの化身として成り切るには、人の死を背負う覚悟が、必要なのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4800z/>

邪神のディープ・キス ~ワンダーランドは眠れない~

2011年12月20日20時53分発行